

「全学共通教育」のひろば

No.15 特集号

# Un roseau アンロソ

総合教育科目ガイドブック

## 40年前の学生生活

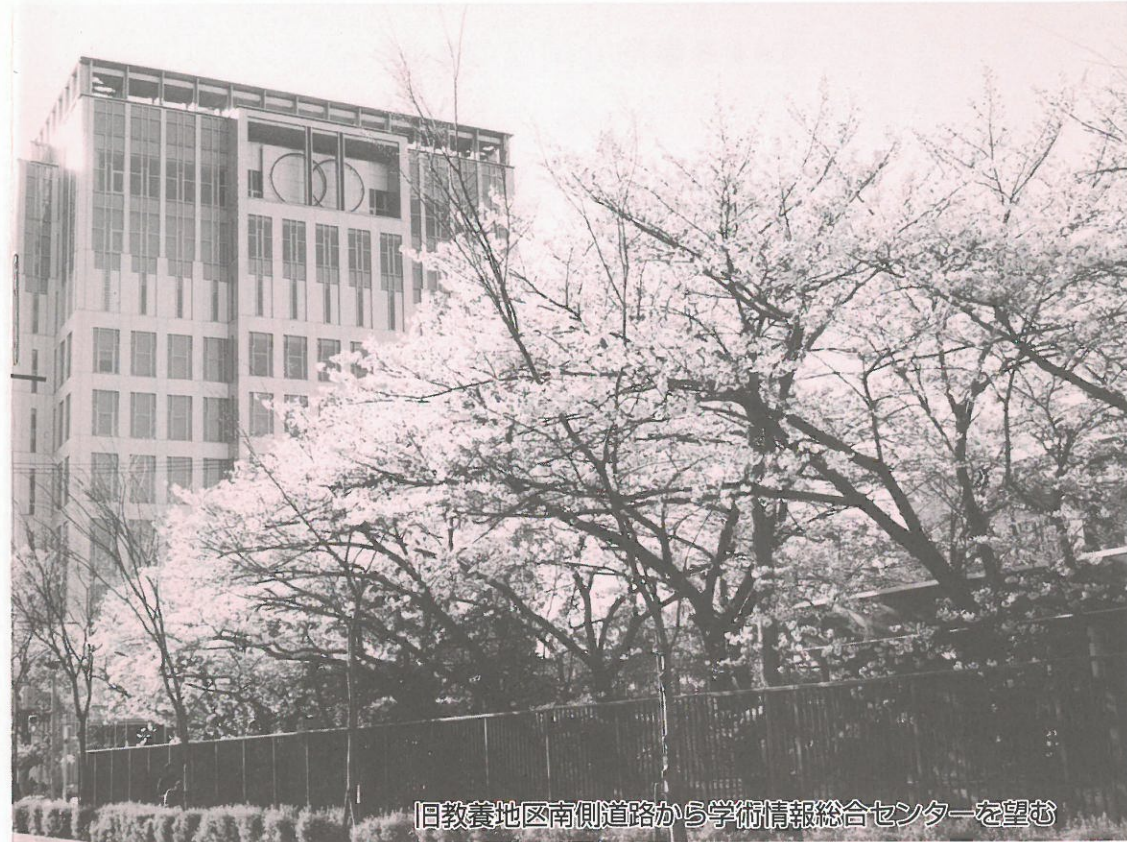
文学研究科・文学部 塩 出 彰

## 教養と科学

生活科学研究科・生活科学部 西 成 勝 好

## 大学で教えること、学ぶこと

経営学研究科・商学部 佐 合 絃 一



旧教養地区南側道路から学術情報総合センターを望む

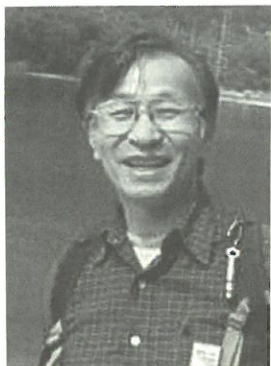
2003年3月

編集・発行 大阪市立大学教務委員会

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2935

## 40年前の学生生活



文学研究科・文学部  
塩出 彰

最近のはやり(?)に「10年日記」というものがあります。A4判1ページに10年分の1日の日記が記録できるようになっていて、毎年書いていると、前の年、その又前の年の同日の出来事が一望できるといふものです。私は一九九二年に最初の「10年日記」をつけ始めて、現在2冊目になっています。小学校の6年生のときから中学、高校、大学時代を経て現在まで(ほとんど三日坊主に近い形で終わった年もあります)日記をつけ続けて

います。

こうして考えてみると、どうも私は少々ものを残しておくのが好きな性質のようです。数年前にも、暮れの大掃除のとき、私が大学に入学した当時の小遣い帳や時間表、シラバスが押入れのダンボールの中から出てきました。

### 学生生活のスタート

私が大学に入学したのは、今から40年前の一九六三年(昭和38年)の春です。

その時の小遣い帖を見ると、4月8日に納めた大学の入学金が一五〇〇円、前期の授業料が六〇〇円となっていて、月々の仕送りが一五〇〇円、三畳二間を合わせて六畳という少し変わった間取りの下宿代が月二〇〇〇円という時代です。家から「鉄道小荷物」にして持ってきたものは布団類一式に衣類と食器、本少々、それに小さなトランジスタラジオ。それと下宿の近くの店で揃えた小さな座り机(一九〇〇円)と本棚(一六〇〇円)に蛍光灯スタンド(一三〇〇円)、さらに洗濯用の

タイトル “Un roseau (アン ロゾ)”

— 一本の葦 — について

B. Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de  
(ロム・ネ・カン・ロゾー、ル・ブリユ・フェブル・ドゥ・  
la nature, mais c'est un roseau pensant.  
ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾウ・パンサン)

一人は一本の葦に過ぎない。自然界で  
もっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。—

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える(思考する、思想する)という行為によって、有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

アルミ製の金ダライ(四四〇円)。これが大学生活のスタート時に私が持っていたものです。金ダライは、40年を経ていまだに我が家で健在です。最初の下宿では電気洗濯機が使えず、手で洗うために買ったのですが、真冬の洗濯のつらかったこと。4月6日から5月5日までの一月間毎日朝・昼・晩と三食食べての食費が、計算してみると五九七八円になっています。

### 教養部での授業

さて、手許のスケジュール表によると、4月8日から11日まで、履修指導やら教員免許状取得に関する指導、入学宣誓式などの行事があり、ようやく12日(金)から授業開始。このあたりの行事についてはあまり記憶に残っていません。高校と違いクラス指定の語学の授業を除けば、自分で時間割を作らなければならないのに、どんな科目をとっていいやらわからず戸惑いました。

当時は、大阪市立大学で現在行われているような四年一貫教育とは異なり、最初の2年間は教養部で教養課程を、後半の2年を学部で専門課程の勉強をする「横割り

1・2限 教育学 心理学 保健理論/運動医学 物理学 ×英語	3・4限 地学 国史学 ×英語 漢文学 哲学	5・6限 英語 ×体育実技 生物学 独語(講読)	7・8限 日本国憲法 独語(文法) ×人文地理学 論理学
---	---------------------------------------	--------------------------------------	--

講義の場合、一回2時間の講義が年間30回で60時間、それに対する自学自習120時間ということになります。授業の倍の自学自習が必要ということ。この点から考え

型カリキュラム」でしたから、当面の問題は「一般教育科目」をどう選択するかでした。人文科学分野、社会科学分野、自然科学分野から各4単位の通年科目を3科目ずつ計12科目、36単位を2年間で取るというのが要件でした。その学年のシラバス(履修指導と教養部案内)というタイトルの、A5判、48ページの小冊子で、開講科目内容概略に20ページが割かれています)によると、人文・社会科学分野の科目が35科目、自然科学分野の科目が9科目(基礎教育科目を除く)開講されていました。皆さんが今手にしている大阪市立大学の全学共通教育のシラバスに比べると格段の薄さですし、開講科目数もずいぶん少ない数です。また科目名も、たとえば哲学、国史学、法学、経済学といった伝統的な学問分野をあらわしたタイトルで、これまた皆さんが受講している現在の全学共通教育の科目名とは大違いです。

どれを取るべきかいろいろ悩んだ挙句の、私の時間割がどんなものだったか、お見せしましょう。次ページの表がそれです。

私の時間割、今考えると、反省すべき点が二つあります。まず第一に、この時間割では一般教育

科目の要件36単位をすべて最初の1年間でとってしまいます(事実、取ってしまいました)。これでは、講義を教室で聴く

だけで、それ以外の自学自習を十分にやる時間をひねり出しようがありません。講義1単位というのは、15時間の授業に対して30時間の自学自習、合計45時間の学習に対して与えられることになっています。通年4単位の

ると、一日にせいぜい2科目程度にするべきだったと思います。こういう履修の仕方はしないように皆さんに言っている本人としては、大変にまずいとり方です。

第二に、入学時私は哲学を専攻したいと思っていましたが、それなら哲学系以外の科目をとるべきでした。哲学や論理学は、どうせ専門課程に上がれば、そこで勉強することになる科目ですから、少しでも多く自分の視野を広げるには、専門課程では学ぶ機会が少なくなりそうな科目を選ぶべきであったと思います。

### 印象に残った三つの講義

最初の年に受講した教養科目の中で印象に残っている講義が三つあります。

その内の二つは大変対照的な講義でした。一つは月曜1時間目の「教育学」です。担当の教授は銀髪で、恰幅も良く、声も朗々と響き、話にもメリハリがあり、映画やTVに出てくる大学教授そのものでした。1時間目にもかかわらず、教室の前のほうの席はすぐになくなるので、いつも結構早めに出席していた記憶があります。と

ところが、ノートもしっかりとり、ちゃんと内容も覚えて臨んだ試験は、芳しい成績ではありませんでした。大学では、講義の内容を覚えるのではなく、それを消化した上で、自分の考えを展開しなければ良い評価は出ないということを知らされた次第です。

この講義と対照的なのが、色白のやや女性的な感じの、まだ若い助教の先生が担当された「論理学」の講義です。この先生は、先の教授とは全く対照的で、教卓の両端を手のひらでつかんで、それを支点に上体をクネクネとくねらせながら、やや甲高い声で講義されました。このクネクネが最後まで気持ちが悪くて仕方ありませんでした。

今思うと、どちらの授業も私には得るところの多かった授業ですが、授業評価アンケートが当時あったとしたら、どうだったでしょうか。「教育学」には相当に高い評価をつけたでしょうが、「論理学」は、とりわけプレゼンテーションは私には最悪、あまりよい評価はしなかつたろうと思います。しかし、「学ぶ」ということは、本当のところ長い時間がかかるものではないでしょうか？一つ一つの授業から、皆さんが何を得たのかは、すぐに見えるものと、そうでないものがあるように思いました。

つづいた歴史的事実が、全くそうではないことを知らされ、びっくりしました。史料のかなり細かい（当時の私からすると）点にまで立ち入って議論されたので、研究とはこんなことをするのかと、大学での学問の現場を初めて垣間見させてもらったという、新鮮な驚きがありました。

### 一夜の出来事

授業以外のことです。学生時代の最も強烈な思い出は、「大学紛争」時の一夜の出来事です。一九七〇年前後、日本の大学の多くは、学生運動で揺れ動いていました。わたしのいた大学でも、教養部は「全共闘」と呼ばれる学生組織に占拠され、更に本部構内の学生部のあった建物も同じ組織によって占拠され、バリケード封鎖されていました。

一九六九年の一月の夕刻、丁度大学から下宿に帰ろうとしたときでした。正門の方で何か争うような大きな声が聞こえてきました。何事かと行って見ると、学生部を封鎖している仲間を応援するために教養部から出てきた

す。私は映画が好きで、学生の頃からずいぶんたくさん映画を見てきました（最近では、ビデオやDVDなどで観ることが多くなりましたが）。ハリウッド映画は、ハラハラドキドキ、華やかで息もつかせぬ面白さです。逆に観たときの印象は余りぱっとせず、ダビングしてもすぐに消してしまったりしたものが、かえって数週間・数ヶ月間後、あるいは何年もした後に胸にズンと迫ってきて、もう一度観たくてたまらなくなることもあります。

大学での学びも、同じではないでしょうか。そこには、すぐに目に見えて私達の役に立つものもあれば、私たちの中で私たちの成長とともに、じつくりと醗酵して、初めて気づかれるものもあります。

もう一つ印象に残っている講義は、これも若い助教の先生の担当する国史学でした。「開講科目内容概要」には、「日本の社会と文化の発展を中心に日本史を概観する。」としか書かれていませんでしたが、中世社会の成立、あるいは武士団の成立等のテーマをとり挙げ、どのような史料から、どれだけのことが、どこまで言えるのか、講義されました。高校までの授業では、そんなことは全て既に決まっていることで覚えるだけのことと思

「全共闘」の学生と、彼等が本部構内に入るのを阻止しようとする教員や学生との間で、正門を挟んで小競り合いが起こっていました。誰からともなく、正門付近に居合わせた教員・学生の手で、近くの教室から運んできた机や椅子で正門にはバリケードが築かれました。さらに本部構内の外から侵入可能と見られる他の個所にもバリケードが作られて、教員や一般学生がバリケードの中にたてこもり、「全共闘」は締め出されるといふ奇妙な事態ができました。

冬のこと、あたりはあつという間に暗くなり、正門の外からは全共闘の学生のシュプレヒコールの声とともに、彼等の投げる石が次々に飛んできて、さながら圧倒的優勢な敵に囲まれ、孤立無援、落城寸前の城のように。中にいる学生・教職員には投石から頭を守るためのヘルメットが大学から配られ、時計台の上からは「頑張ってください」と学長からの激励放送。本部構内の諸処には焚き火が焚かれ、交代で暖を取る教員・職員・学生の輪。学部事務室ではインスタントラーメンが夜食にふるまわれました。そんな中、「日大全共闘の精鋭が、東名高速道路を貸切バスに乗って目下応援に駆けつけている」という情報まで流れてきました。居合わせた多くの

者にとつて、その時はいかにもありそうなことに思え、緊張感が一層高まりました。冷静に考えれば、ありえないことなのですが。

一夜明けて、バリケードの外に出て、正門にまわって見ると、そこにはせいぜい30名程度の全共闘の団が、寒々とした朝の空気の中で身をすくめるように行進していただけでした。これが、一夜の恐怖と興奮の正体でした。本部構内に張り巡らされた逆バリケードも、大学によるヘルメットの配付も、時計台からの激励放送も、夜食のインスタントラーメンも、後から考えればおかしなことばかりですが、その中にいた者には、その時は極めて自然なことに思えたのです。人間がある状況に巻き込まれた時、どんなに簡単に正常な判断力を失ってしまうか、自らの身をもって経験した瞬間でした。私たち学生は別にしても、中にいた先生方は専門家として優れた見識の持主ばかり、1歩外に出て見さえすれば、ちよつと視点を変えて見さえすれば、誰もがその奇妙さに気がついたはずなのですが…。

#### 複数の視点、広い視野をもつこと

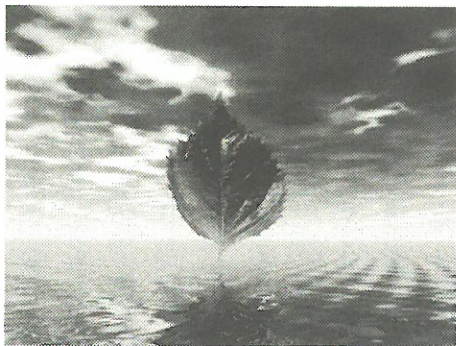
違う視点でもの事を見ることができると、これが大事なことなのです。専門を学ぶとは、程度の差こそあれ、閉ざされた領域を極めることです。そこに、逆バリケード内の一夜のようなことが起こる恐れが出てくるのです。専門を極めれば極めるほど、その恐れはますます強くなります。そのためにこそ、専門とは異なった視点が必要になってくるのです。専門化すればするほど、専門とは異なったことを学ぶ必要があるのです。全学共通教育の大きな役割は、ここにあると思います。

大学では専門的なことだけを教えてくれればよい、あるいは目に見えて役に立つことを教えてくれればよい、という声があります。専門的なことからは、どれほど学際的なものであろうと、やはり専門的で、限定されたものです。しかし、皆さんは刻々と変化して行く社会の中で、様々な人々と交わり合いながら、社会人として生きて行くのです。複数の視点、広い視野こそが、皆さんの判断を支え、皆さんの人生をより豊かにしてくれるのです。

また、役に立つ知識とは何でしょうか？知識であれ、道具であれ、人であれ、「何か」の役に立つものは、そ

れが役に立つ肝心の「何か」が、見向きもされなくなつた途端に役に立たないものになってしまいます。刻々と変化する社会の中では、求められる「何か」も刻々と変わっていきます。その意味で、永久に役に立つものなどないと言えるでしょう。役に立つ知識も、その持主も、いつか役に立たなくなる日がきます。自分自身と向き合ったときに、皆さんを内から支えてくれるもの、それが本場の知識、教養ではないでしょうか？それは、専門も、専門以外のことも、広く学び、自分の頭で考え、時間をかけて、じっくり醸酵させることを通して、得られるものではないでしょうか？

大阪市立大学での皆さんの学生生活が、実り豊かなものであることを祈ります。





生活科学研究科・生活科学部  
西成勝好

とうとう還暦を迎えることになってしまった。「少年  
老い易く学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず」とは  
よく言ったものである。大学に入学した頃は、大いに野  
心があつて、何か世に残るような立派なことをしたいと  
思っていたが、たいしたことでもできずに馬齢をかさねて  
しまった。

「四〇にして惑わず」と言うのはよほど優れた人ある  
いは早熟の人にのみあてはまることであろう。人間は悩

大したこともできていない一介の教師が新入生諸君に  
教養科目について何か有益な助言などできそうにない  
が、つまらぬ失敗を繰り返さないためには、何かの参考  
にはなるかもしれない。

十年ほど前に大学から教養部というものが消えてしま  
ったが、私はそのときにいやな気持ちになった。教養と  
言うものは大切なものだと今でも思っているからであ  
る。教養というものは、博識を人に見せびらかして得意  
がるものではないし、自分がより良く生きる糧のような  
ものではないかと思う。私が学生の頃の文系の友人の悪  
口を言うつもりはないが、「太陽の周りを地球が回って  
いる。しかし、地球にいるものから見れば、太陽が地球  
の周りを回っているように見える。」と言うことがわか  
らない人がいた。教養科目で物理の初歩を勉強し、座標  
変換を知れば、このことはすぐ納得しそうなものでは  
ある。第一、子供の歌にあるように、汽車に乗って窓から  
外を見れば、電信柱が後ろに走っていくように見えるこ  
とは体験するはずである。しかし、この秀才は「それで  
はガリレイやコペルニクスが命をかけてまで守ろうとし  
た地動説は間違いなのか？」と言う。おそらくこの秀才  
は歴史のことは詳しく覚えているのであろうが、どうも

むものである。「十有五にして学に志す」と言っても、  
今の若者の中には少ないであろう。牧野富太郎はまさに  
十五歳のときに植物学をやると決心し、高知から東京へ  
行った。良く熟慮して、目標を定め、それに向かつてわ  
き目も振らず一直線に進むことができる人はそれで良  
い。しかし、そのようにできる人ばかりではないであろ  
う。そのような秀才は以下の駄文を読むことはない。時  
間の無駄である。私もその時々には、自分としては頑張っ  
ていたつもりである。しかし、今振り返ってみると、如  
何に能率の悪いことをやってきたのか、寄り道をしたの  
か、慨嘆せざるを得ない。科学研究者の端くれとして、  
実験の結果がどうなるか、わくわくしながら科学の研究  
を進める間に「してやったり」、面白いことがわかった  
と何回か経験したことはあるが、いずれももの見方を  
根本的に変えるほど画期的なことではなかった。そのう  
ち、段々「大器晩成」とでも考えなければ、生きている  
のも辛くなるわけである。「ジャン・クリストフ」の中  
の学校で音楽を教えている先生が、難しい曲の一節を弾  
けるようになったことで、一日の満足を見出したのにも  
似たような心境であろうか。しかし、科学者としては、  
良い意味での野心を捨ててはいけないと自戒している。

理科系の考えにアレルギーでも有ったようである。

大学の入学試験もその後の各種資格試験もどうも知識  
の総量を量るような、丸暗記形の学習を強いているよう  
である。基礎知識をしっかりと覚えておくことは非常に大  
切であることを否定するべきではない。日本人として覚  
えておきたい歌や詩などもあるだろうし、理科系でも、  
特に数学など公式を覚えていなくては先に進めないこと  
も確かであろう。しかし、咀嚼しないでとにかく覚える  
だけでは、自分でその知識を活用することもできないは  
ずである。思考のトレーニングをするには数学や物理な  
どは格好の学問だと思うので、特に文系の学生諸君に、  
かじってみることを勧めたい。日常生活、自然現象がど  
のように起こるのかわかることはとても面白いことだと  
思う。おいしいものがあるのに食べないのを「食わず嫌  
い」と言うが、本当にもつたいたい話である。誰でも、  
枯葉とりんごでは同じ高さから落ちたときに、りんごは  
短時間のうちに落ち、枯葉はひらひら舞いながらゆつく  
り落ちることを知っている。そこで、ニュートンは重力  
の法則に思い至り、ヴェルレーヌは美しい詩を作った。  
しかし、科学博物館に行ってみると、太い筒の中を真空  
ポンプで排気すると、パチンコ玉と鳥の羽(りんごと枯

葉でも同じことになる)が同時に落下するのを見ること  
ができる。風の影響や空気の摩擦に影響されなければ、  
これらの物体が同時に落ちるのを観ることは面白くない  
だろうか？

しかし、世に言われるように、理科系で優れた業績を  
挙げた人の中には奇人変人が多いのも事実であろう。幸  
か不幸か私の周りにはそのような学友はいなかった。し  
かし、広い世の中には、たとえば、数学者には岡潔など  
のように変わった学者がおられた。芸術家の中にはもつ  
と頻繁に変わった人を見つけることができる。ゴッホの  
絵はその強烈な個性で見る人を釘付けにする力を持つ  
し、ベートーベンは聴力を失い自殺まで考えたが、負け  
ずに突き進んで、素晴らしい曲を作り続けた。このよう  
な例は枚挙に暇がない。このような人を世の中では天才  
と呼ぶが、自分が惹かれる対象に没頭し、打ち込んでそ  
れを絵画あるいは音楽と言う形で表現したことに、人は  
感銘を受けるのであろう。

しかし、凡人にとつては、いろいろなことに少しずつ  
興味を持つほうが自然であろう。あたかも、いろいろと  
おいしいものが沢山あると、それぞれの味を見てみたく  
なるのと似ている。現在の世の中では、ある一つの事を

が盛んに行われてきた。科学の発展の過程で、不可解な  
現象あるいは物質を理解するためには、いずれも必要な  
ものであることは論を待たない。ある特定の分野で画期  
的な業績を挙げることはたしかに素晴らしいことで、そ  
の分野の発展に貢献したと言うことで表彰されることに  
なるのは当然である。今年も、物理と化学で二人が同じ  
年にノーベル賞を受賞すると言う、日本人にとって嬉し  
いニュースが報じられた。ところで、レオナルド・ダ・  
ビンチのような人は非常に多くの分野で業績を挙げたこ  
とが知られている。科学が発展する過程で、個々の分野  
が細分化され、個々の現象なり、対象とする物質に分析  
のメスが加えられ、外から概観しただけではわからない  
本質を見出していく過程があったことは当然の成り行き  
であったろう。しかし、ゲーテは近代科学が全体を捉え  
ないで、自然を切り刻んで、部分しか捉えないようにな  
っていかうとするのに対して、危惧の念を持っていたよ  
うである。(ピエール・チュイリエ「反科学史」小出  
昭一郎監訳、西成勝好、寺田元一訳、新評論)。この本  
は決して反科学の本ではない。著者チュイリエは残念な  
がら4年前に死去したが、彼は「科学万能主義」に警告  
を発したのである。科学というものは時間とともに進歩

専門的に深く窮めて、他の人に抜きん出た業績を挙げる  
ことが尊ばれる。専門以外のことに手を出すことは「遊  
ぶ」ことであるとみなされる。絵画を見たり、音楽を聴  
いたり、歴史の本を読んだりすることは、画家や音楽家  
や歴史家でなければ遊びということになるようである。  
高校の漢文の先生は2年生には「遊びの中に勉強を見出  
せ」、3年生には「勉強の中に遊びを見出せ」と言っ  
ておられた。遊びと勉強(仕事)はそれほど違わないのか  
もしれない。でも少なくとも普通の人は仕事をして、対  
価を受け取らなければ暮らしていくことができない。遊  
びと勉強は同じなどと言っていると、何かあることに抜  
きん出た業績を挙げるということにはならないであろ  
う。しかし、おいしいものを少しずつ食べてみたいと言  
うのは、厚生労働省・農林水産省・文部科学省が推奨し  
ている、健康に良いとされている食べ方、「一日30種類  
以上の異なるものを食べなさい」と一致している。サル  
トルが「ある指導者の一生」の中で、主人公が一つのこ  
とに熟達していく過程で、ほかの事を切り捨てていくこ  
とを描いていたように記憶しているが、多くのことに熟  
達するのは不可能かもしれない。

分析と総合の関係について、科学史家の間では、議論

して、過去には理解できなかったことが理解できるよう  
になり、人間の自然に対する認識は深められてきたが、  
現在の科学は完全ではなく、わからないことも多い。お  
そらく、現在わからないことが理解されると、現在は不  
思議には思わなかった新しい「わからないこと」が見つ  
かるであろう。したがって、現在の科学によって全てを  
理解できない以上、特に人間の感情、恋愛、人や芸術な  
どの好き嫌いなどを(現在の不完全な)科学によって判  
断したり、決めたりするのは科学の越権行為であろうと  
いうものである。

さて、ゲーテの話に戻る。彼は「世界には新しいもの  
は存在しない」と言ったが、それはあくまでも精神の世  
界に限った話であると、小出昭一郎先生は言われた。  
チュイリエの本でも紹介されているし、有名な話なの  
で、知っている人も多かろうが、ゲーテは解剖に興味を  
持っていて、それまで誰も見つけたことのない間頸骨を  
発見したのである(上掲書)。もちろん、ゲーテは科学  
者としてよりは文豪として知られていることは言うまで  
もないが、自然にも興味を持っていたことを知らない文  
学者もいるらしい。もつとも、「ファウスト」の冒頭の  
「ありとあらゆる学問などしてみたが……」などとい

うせりふに惑わされて、実際には大して勉強もしていないのに、自分もその主人公になったような気分分、悟りを開いたようなつもりでいる若年寄りも多いようである。だから、彼は精神界ではなく自然界では、新しい発見というものが在りうることを自分で体験的に知っていた。したがって、「世界には新しいものは存在しない」と言うゲーテの言葉は、ギリシャの古典劇などには時代を超えて胸を打つものが含まれているし、人間が恋をしたり、たわいもないことで嫉妬したり、喧嘩をしたりすることは、昔から変わらないというような、精神界のことを指していたに違いない。

高校生くらいの時には、一体如何して自分はこの世に生きているのだろうか、と言うことに真剣に悩み始めるものである。私の高校ではヘルマン・ヘッセとかロマン・ロランなどが流行っていたが、最近はまだあまり読まなくなつたようで寂しい気がする。日本の近代作家のいわゆる私小説の中にはそのような問いに対する解答を見つけられないような気がして、そのような問いへの直接的な解答が哲学書から得られるのではないかと思う若者も多かった。後になって、漱石や鷗外が西欧文化と接して、いかに受容するか苦悩していたことを知った。理科

を持つていたが、私はそれに感動してお手伝いすることになった。私が高校時代にロランのフランス革命連作劇の中の「愛と死の戯れ」を級友と上演し、それ以後も彼に励まされてきたことを書いた手紙を見て、夫人も私になら手伝いをさせようと思つたらしい。文科系でそれを本職にする人に任せると、資料を盗まれたり、恐ろしいことになることを警戒していたようである。

3年前に本学で講演していただいたピエール・ジル・ド・ジェンヌ教授（一九九一年ノーベル物理学賞）から、プリモ・レヴィ（数少ないアウシュヴィッツの生き残り）の本をいただき、読み始めた。先日、国際会議に招いたフランスの科学者のお嬢さんはまだ15歳程度であるのにレヴィのことを知っていた。ヨーロッパではかなり知られているらしい。日本でもかなり翻訳されているので、読まれた方も多いかも知れない。このレヴィの言いたいことの中で大切なことは、ナチが非道なことをしたことは誰でも知っているが、それではナチはそれほど巧妙に世論を抑え、一般人の目から隠しおおせて、完璧に虐殺をしたのか？それに反対したレジスタンスの闘士たちは逮捕され、殺された。それでは、いわゆる普通のドイツ人はどうだったのか？と言う疑問である。最近の

系の人にはジャン・クリストフのひたむきな生き方に共鳴を覚える人が少なくないようである。科学者には、世の中の権威などを気にしないで、事実と理性のみに従って論理的に理解しようとする姿勢が大切なはずである。ジャン・クリストフも生身の人間であるから、過ちを犯したり、友達を裏切ったりもするが、基本的にはあくまで誠実に生きようとする姿勢が科学をしようとするものと共通のところがあるためではなからうか。

さらに、ロマン・ロランの「戦時の日記」「戦いを越えて」などを読んで、社会主義者たちさえ賛成した戦争に反対し、「売国奴」などと罵られても、あくまで戦争反対を貫いた強固な精神に感動した。科学者だけではなく、いろいろな仕事をして、首尾良くいかないことがあつても、彼の不屈の生き方に励まされた人も多いことであらう。20年ほど前にフランスに滞在していたときに、ロマン・ロラン夫人のお手伝いをしたことがある。彼は若くてまだそれほど有名ではなかったときにトルストイに手紙を書き、丁寧な返事をもらつて、感激し、それに倣つて世界中の友人たちに沢山の手紙を書いており、その一部は日本語にも訳されている。夫人はその手紙などを整理し終わるまでは死ぬことができないう言つて使命感

加藤周一氏の講演録によれば、ナチが一割、レジスタンスが一割とすると、残りの8割の人たちはどうだったのか、と言う問題について、貴重な資料が出てきて、ヨーロッパでは書物として出版され、展覧会が開かれていることである。（この講演録からもうひとつ改めて感じることは、自然科学と社会科学の違いである。近・現代史などは封印されていた史料が明るみに出ると「進歩」する。人為的に隠されていた、時には捏造にだまされて曲がった歴史が横行する。考古学のいやな事件が記憶から抜けない人も多からう。政治の世界も同じらしい。自然は人をだまはしはしない。それでも、自然科学者は人間嫌いになつてはいけなない。）このようなことが明らかになつてくると、人間は自分の仕事だけを忠実にやつていれば良いということにもならないのであろうか？やはり8割の人たちがどうするかが大切なのではないか？今、深刻になりつつある環境問題などは、大多数の人が一人一人自分の問題として捉えない限り、真の解決などありえないように思う。現代のように忙しくなつてくると、どうしても便利で速いことに頼ることになる。それは使い捨てを助長することになる。コンビニが24時間開店していることは、とっさの時には大変ありがたい



ことではあるし、男女平等参画社会にしていくなために、家事に費やす時間を減らすことができれば難しいであろう。しかし、みんなが便利な使い捨て容器を使つて食事をし、使い捨て掃除具などに頼つて、ごみを増やしてその処理に頭を抱えているような現状をどうすれば良いのであろうか？イタリアから発信されたスロー・フード運動などをどう考えるべきであらうか？忙しい人は駅でそそくさとうどんなどを掻きこんで昼食とする。忙しいことは仕事があるということの良いことである。しかし、それは家族生活、ゆとりのある生活を切り捨ててのみ成り立ってきた。何のための忙しさか？フランスの寒村でハンバーガーショップができるのに反対して、店を破壊した闘士が投獄されたが、村人からは英雄と見られていると言う報道があった。しかし、みんながあまりにのんびりやっていたのでは、経済が停滞することは間違いない。人口が過密な都市ではこのような問題を解決することは難しいが、人口の都市集中を避けることは難しいのであろう。本学の学生諸君が都市型大学の一員としてこのような問題を主体的に捉えて、それぞれの得意な分野で活躍してくれることを期待したい。そのときに、細分化された分野の中でのみ考えるのではなく、総

合大学の学生として広い視野で考えて欲しい。まさに教養科目を勉強し、違う学科の友人も作ることもしやすい環境に恵まれているので、総合的な視点から始めて解決可能な問題に取り組める立場にある。

生活科学とは問題解決型の総合科学である。問題解決のためというだけで、応用科学的な色彩が強いが、応用のためには基礎が不要と言うことではない。実際問題に直面するとその問題を根本的に解決しようとする、その基礎となることを解明しなければわからないことが多い。人間の能力は限られているから、何でもかんでも一人で勉強し解決することは不可能であるが、学生時代に広い視野を養うことは大切なものではなからうか。ある問題を解決するのに一方向から見ただけでは難しいのに、複数の角度から見ればよく理解でき、解決の糸口をつかむことができる例は多い。自然科学と人文・社会・芸術文化との融合はどのように可能であらうか？総合を目指すと言うことで、上っ面だけを眺めただけでは「生兵法怪我の元」と言うようなことにもなりかねず、鍵となるような根本問題を根底的によく理解するような訓練がなければ、大したことはできない恐れがある。谷生活科学研究科長が館長を勤めておられる「住まいのミュージア

ム」には江戸時代の町屋の復元されたものが展示され、大変楽しい。理系の人もぜひこのような歴史に触れてみたらどうかと思う。昔の生活の知恵を衣食住の面から、垣間見て、いろいろなヒントが得られるに違いない。最近、児玉学長が上海を訪問され、本学の学生諸君に上海に生活してその活気に触れ、諸君と同年代の青年たちのひたむきな向上心に接して欲しいと言つておられるが、同感である。現代は旅行が安くなり、昔に比べれば観光旅行は盛んになったが、観光名所を巡るような旅だけではなく、その土地に生活し、働いてみることである。ピエール・ジル・ド・ジェンヌ教授がフランスの高校を巡つて科学の面白さを講演されたものをまとめた名著（邦訳、「科学は冒険！」西成勝好、大江秀房訳、講談社ブルーバックス）の中で言つておられることと同じである。18世紀頃、欧州でも金持ちの坊ちゃんたちの間に物見遊山の遊学が流行つた。グランドツアーと呼ばれている。親の期待に反してあまり良い成果が挙げられなかった例が多いらしい。人間は誰でも井の中の蛙になりやすいので、見聞を広めることは大切であらうが、そこで生活してみなければわからないことも多い。私も生活するといふほど長く上海に滞在していないが、あちらで

接する学生たちは非常に目が輝いていて、ひたむきであり、どこか投げやりな、白けたような学生には出会わなかった。大変すがすがしい気分である。本学の学生諸君が入試で疲れて、学問に意欲がわかないなどということはないであらうが、世界の中には食べ物すらなく飢えている人、戦乱におびえている人、上海であるいは他の都市でもひたむきに勉学に励んでいる同年代の青年も多いことから目を背けずに、有意義な学生生活を送つて欲しい。



## 大学で教えること、学ぶこと



経営学研究科・商学部

佐 合 祐 一

と」とは、それを教える大学の役割とは、いったい何なのでしょうか。大学の果たすべき役割も学生が大学で学ぶべきことも、大学と学生が置かれている状況によって異なってくると考えられます。

ピューリタン（清教徒）を中心とした人々が、メイフラワー号でポストン近郊のプリマスに到着したのは一六二〇年でした。彼らは植民地議会からの補助金と寄付金で、一六三六年にはハーバード大学（最初の寄付者であるジョン・ハーバード牧師の名前をとっています）を設立し、2年後には、牛の飼育場内の町から寄贈された小さな校舎で開校しました。一六四〇年代の不況期に授業料を現金で払えない学生は、農作物、衣類、生きた家畜などで支払ったといわれています。当時の新大陸では学識のある牧師や政治行政を行う知識人が必要で、17世紀におけるハーバード大学の卒業生の半数以上は牧師の道を選びました。ハーバード大学という実践的なビジネス・スクールを直ぐに考えがちですが、学部の教育は現在でもリベラル・アーツが中心になっています。社会や経済が高度化・複雑化して、職業的な専門知識をもった人材が必要になるにつれて、アメリカではビジネス・スクール、ロー・スクール、メディカル・スクールなど、

## アメリカの大学と日本の大学

私は商学部という実学的な学部で、企業財務論や証券市場論という、きわめて実践的な科目を担当しています。私のゼミナールに入ってきた学生に「ゼミでなにをやりたいの?」と聞くと、よく「社会に出てからじっさいに役に立つことをゼミでしたい」と答える学生がいます。そこで「何が役に立つの?」と聞くと、答えに詰まっています。大学で学ぶべき「社会で役に立つこ

高度な職業専門教育を行う大学院修士課程が拡充されていきました。

「富国強兵」という言葉に示されているように、明治維新後の日本では、機械の導入による産業革命を急速に進めるとともに、近代的な軍事力を強化する必要に迫られました。そのための人材を育成するために、「読み、書き、そろばん（計算）」を中心とした初等中等教育が義務教育として整備・充実されました。日本は世界でもっとも初等中等教育が普及した国の一つでしょう。同じ時期に、近代的な法治国家としての法行政に必要な官僚（役人）と、高度な知識をもった工業技術者の養成が大学の役割とされ、日本の大学（代表的には旧東京帝国大学）は法学部と工学部から始まりました。日本では旧制の高等学校が教養教育の課程とされ、大学の学部では主として専門教育が行われてきました。また職業的な専門教育機関として、商科大学（本学の前身）などの専門大学が設立されました。高度な専門教育機関としての大学院（修士課程）は発達しませんでした。

## 戦後の日本の大学

戦後になって占領国であるアメリカから、日本の大学教育は専門教育に偏重しており、「リベラル・アーツ」を重視する必要があるという批判と勧告を受けて、日本の大学制度が再編成されました。旧制の高等学校が廃止されて、新制大学の教育課程を前期2年間の教養課程と、後期2年間の専門課程に区分して構成することになりました（医学部や夜間課程を除いて）。そして教養は広く身につける必要があると考えられたので、人文系、社会系、自然科学系の各々の分野について、最低3科目ずつを履修しなければならないと定められました。アメリカとは異なって、専門教育のための大学院が構想されなかったために、旧制高等学校の教養教育と旧制大学の専門教育の内容を、新制の大学の教育課程を分断して、そこに押し込んだ形になりました。かなり無理で中途半端な大学の教育課程であったと私は思っています。とくに教養課程での教育については理念や目的が明確ではなく、改革が必要であるといわれながら、20世紀の終わり近くまで、こうした日本の大学における教育課程は続けられました。

何回か景気の変動はあったものの、一九九〇年までは

日本の経済は成長を続けてきました。しかも「日本的経営」と呼ばれたように、日本の企業は終身雇用、年功序列型賃金、企業内組合といったシステムを前提として、企業の内部で専門的な職業教育（企業内教育）を実施してきました。しかも経済の高成長に伴って、企業も大学卒業生の採用を拡大したために、学生と大学にとって「春の時代」が続きしました。高校時代に受験勉強をして、それなりの大学に入って卒業すると、それなりの企業に就職できて、企業内で必要な職業教育を受けて、定年まで過すことが出来ました。大学は企業への就職のための通過点であって、学生も、大学も、企業も、大学での教育と学習の内容については、それほど強い関心をもたなかったといえます。大学へ入る目的が良い企業（大企業であった）へ就職することであったとすると、「社会で役に立つ」は「会社に入るのに役に立つ」ことで、極端に言えば大学に入って、とにかく卒業すればよいと考えられていた時代でした。

接民主制を、経済的にはものを造ってみて売ってみるといふ、市場経済を選択せざるを得なかったのです。しかし直接民主制も市場経済も、個々の市民が直接参加して行動し、その結果には個々人が責任をもつというシステムです。そのためには、既存の秩序、常識、観念、慣習、迷信などから自分を解放して、自由で自立した人間になる必要があります。リベラル・アーツというのは、自分を解放して自由で自立した人間になるための教育なのです。八百万の神を信じ（？）、国家政府が前提となつて社会を統制してきた日本では、自分を解放するというリベラルの意味が理解できなくて、教養教育と考えたのだと思います。日本で教養という場合には、広く知識を身につけて、人格を高めるといふ意味が強く、たしかに大学の教育においても重要なことです。しかし教養という語には、自分を解放するといった、強い目的意識はないと思います。日本の大学の教養課程での教育に明確な理念や目的がなかったのも、このへんに原因があったと思われる。

ノーベル賞を受賞した田中さんは、失敗した実験が受賞の研究業績につながったと言っていました。従来の常識的な実験にとらわれていると、新しい独創的な研究結

#### これからの大学

平成3年に大学の設置基準が改正・緩和されて、それまでの教養課程と専門課程への教育課程の区分が必要でなくなりました。各大学とも教育課程の改革に取り組みましたが、本学でも教育課程の改革のための全学委員会（教育課程改革委員会）が設置され、私が委員長を務めました。私は大学教育が専門ではありませんから、色々な問題に突き当たりましたが、私にとって大きな疑問の一つは、アメリカの「リベラル・アーツ」とはなにか、日本の「教養教育」と同じなのか違うのかという問題でした。アメリカの企業史や金融史が私の研究領域の一つですが、アメリカの歴史や関係する文献をみているうちに、彼らにとつてリベラルとは「解放された自由」であつて、きわめて重要な概念だということが解ってきました。

メイフラワー号でアメリカに移住した人々は、イギリスの既存の政治や宗教から解放されて自由になりました。旧大陸から新大陸への移住は、旧い秩序から解放されて、自由になるためだったのです。同時に社会を統制する国王も法皇もいませんから、新大陸で新しい社会と秩序を形成しなければなりません。政治的には直

果が出なかったということでしょう。天動説から地動説へのコペルニクスの展開も、ニュートンのリングも、それまで常識とみなされていた考え方にとらわれていると、不可能であつたと思います。しかも自分を解放して自由に思考するという必要性は、科学技術の領域にとどまりません。従来の大企業の発想法にとらわれていると、ベンチャー企業は生まれません。日常的にも、ものごとを客観的にみて判断するためには、自由に思考できることが不可欠です。

しかしこのことは、これまでの伝統や習慣あるいは考え方を、すべて否定すべきであるということではありません。否定するか、肯定して継承するかを判断するためには、自分を解放して自由で客観的な立場にたつ必要があるということです。

本学の教育課程は、各学部が提供する教育と全学に共通した教育とから構成されています。学部教育は各学部特有な専門的知識を修得するための教育が中心になっています。それに対して全学共通教育は、人格や教養を高めるための教育、科学的あるいは論理的に思考する能力を高めるための教育、あるいは自分を解放するという意味でのリベラル・アーツなどが包括されています。人

## ●●●●●●●● 筆者略歴 ●●●●●●●●

### 塩 出 彰 (しおで あきら)

1945年生まれ  
1972年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学  
現在、文学研究科・文学部教授  
専攻分野／古代ギリシア哲学  
担当講義／西洋の思想 地中海の文化 哲学史通論

### 西 成 勝 好 (にしなり かつよし)

1942年生まれ  
1971年東京大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学  
現在、生活科学研究科・生活科学部教授  
専攻分野／食品科学 食品・生体高分子物性  
担当講義／食品プロセス科学 調理科学 食物学II

### 佐 合 紘 一 (さごう ひろかず)

1943年生まれ  
1974年大阪市立大学経営学研究科博士課程単位取得退学  
現在、経営学研究科・商学部教授  
専攻分野／財務論 証券市場論  
担当講義／財務論 証券市場論

## 編集後記

【Un Roseau】も第4号を数えます。

今年になってから新聞紙上でも「教養教育」という見出しがよく目につくようになりました。環境汚染、戦争と平和の問題、経済の動向、どれをとっても狭い専門の枠にとどまっただけは見通しのきかない難問ばかりです。人間らしく生きる、あるいは地球人として生きるために、私たちが教養の意味をもういちど考えてみたいものです。

今号にも3名の先生方がご寄稿くださいました。学生の皆さんが大阪市立大学で総合教育科目を学ぶ手引きとなれば幸いです。

大阪市立大学公式ホームページ 大学教育検討委員会ホームページ

kentoi@mae.osaka-cu.ac.jp

間そのもの、人間と人間の関係、人間と自然との関係といった「人間」を中心にして構成されており、各学部に通して必要な教育という意味で、全学共通教育と呼んでいます。

社会や経済の高度化・多様化・複雑化、終身雇用制と企業内教育の行き詰まりなどによって、日本でもビジネス・スクールやロー・スクールなどが開設されるようになってきました。今後10年間には、こうした専門大学院（修士課程）が急速に拡大すると思われます。大学を出て実際に職業的な経験を積んでから、必要と認識できた高度な職業的専門教育を、夜間を含めて大学院で改めて学ぶことが出来るようになってきました。それだけに大学（学部）では、自立して判断できる人間を育てるための教育が重要になってくると思われます。経済的な側面から考えても、市場経済というのは個々の人間が市場に参加して、判断し行動し責任をもつということです。したがって市場経済化が進めばすむほど、個人が自立すること強く要請されます。

本学での教育課程の改革が行われてから10年近くになります。前回の改革は、専門教育が学部段階で終わることを前提にした改革でした。今後は日本でも、多様な専

門大学院が設立・拡充されて、専門教育が大学院レベルに引き上げられるとすると、大学も学生も、改めて大学（学部）で教えることと、学ぶことを考える必要があると思います。学生諸君には、社会や経済の変化をみながら、「パンキョウ」と呼んでいる全学共通教育の意味を、改めて十分考えることを勧めさせていただきます。

